

BOOK REVIEWS

『美しい海の浮遊生物図鑑』

若林香織・田中祐志（著）

阿部秀樹（写真）

文一総合出版 2017年11月9日刊行 180 pp.

ISBN 978-4-8299-7221-2 2,400円＋税

多彩極まる海洋プランクトンの世界を、職業柄、主に大学生を対象に実習・講義を通して教育することが多い。その際、我が国や欧米の教科書等を参考にしても、種まで落とせないことが多々ある。その事は、却って謎だらけのプランクトンの世界に興味尽きないものにしてくれる。しかし、自身の専門範囲ならばいざ知らず（本書の有クラゲ類とクシクラゲ類の大半は山口県青海島での撮影で、稀少種ベニクラゲモドキは新参地等、日本海産の肉眼的“クラゲリスト”として有用）、全般にわたってとなれば種以上のランクへの落としどころが問題であろう。

今回、本書を手にした時、クラゲ類の他に多分類群にわたる数々の素晴らしい写真にも信頼できる同定と解説を施していると感心した。変態する海洋動物の多彩で魅惑的な姿はまさに永遠の宝である。宝探しに携わったお三方のご苦労は並ならぬものがあつたかもしれない。宇宙のオアシスである地球、否“海珠”で生きとし生ける現生動物33門（教科書的配慮で分類）の大半が海洋暮らしなのは周知である。しかし、各種の生活史が全て分かっている種は極めて少ない。確かに、昨今、得体のしれないプランクトンの正体を遺伝子鑑定で突き止めることができる時代に徐々にってはきているのだが…。

本書は25年もの歳月をかけて、日本の中部以南各地（神奈川県・富山県から沖縄島周辺及び小笠原諸島）の水深数m前後の海洋で撮影し、相当たくさんソースから選りすぐったものであろう。180ページにわたって、メソ・マクロ・メガ動物プランクトンの紹介を中心としている。多様な動物門の幼生・幼稚体・仔稚魚・成体等が250種以上取り上げられているのである。特にイセエビとセミエビやイ



カ・タコ及び魚類の章はさすがに素晴らしい。登場する浮遊生物一覧が、本書の最初の方で実物大で紹介されており、多種多様のミニチュアのプランクトンの代表選手の姿がオンパレードで一目瞭然で、関心のある分類群へもすぐ飛べる。そして、各所に散りばめられた宝石の様な生き物に目を見張らせられる。日本初公開種も多々ありそうである。

本書の諸所に、背景の色をメインブラックから変えて紹介しているもの、例えば3mのサケガシラ属や25cmのイセエビ等は、ネクトンやベントスのこともあるが、大形プランクトンとして、最長20mに達するとされているナガヒカリボヤ（1.2m）にも目を見張る。ウキゴカイ類の体長（50cm）には度胆を抜かれた。両者にはいつか海で会いたい。こうして取り扱ったプランクトン全種のサイズを記録している本書はとても労作である。ここで、評者が最も興味ある有クラゲ類に再び目を向けると、例えばベニクラゲ属の一種が10mmとなっている。それ程のサイズになるのは、北日本に分布するベニクラゲで、口柄は紅色である。その色にならない南日本産のニホンベニクラゲとチチュウカイベニクラゲは、目下その半分位のサイズなので、どちらの種でも本書での記録が特大・最大となるのかもしれない。

本書で取り扱われている動物門は、脊索動物（脊椎動物と尾索動物）；半索動物；毛顎動物；棘皮動物；箴虫動物；節足動物；軟体動物；環形動物（星口動物を含む）；有櫛動物；刺胞動物である。昨今、本書の様なプランクトン撮影を狙う世界の浮遊系ダイバーも周知と思うが、本書をもってしても身近な港湾や海の沖合に暮らすプランクトンの尽きせぬ未

知の世界を、まだまだ堪能できそうである。というのも、双眼実体顕微鏡を使って観察してみれば、もっともっと出現する動物たちが控えている。そして、それらよりもさらに小さな放散虫、有孔虫、藍藻なども存在しているが、これら動物界以外の生物も本書の末尾で確かに紹介はされている。そういえば、本書の表紙裏にヘッケルの描いた放散虫の殻の精密な造形美の隠し絵があった。このような生物を、クロミスタ界等にも留まらず、本書漏れしたはずの多くのソースを用いて、姉妹編の刊行も期待したい。いずれも電子版で画像の自由拡大ができるVersionもつくれば良いと思う。海球で生きている地球生物は本当に奥深い。地球の命の宝箱である。電子顕微鏡を使えば海洋細菌も分かるだろう。生産者である植物プランクトンも多様である。しかし、海球の汚染が富に懸念される昨今である。全生物がその影響下にさらされないで、青く美しい海で

厳しい食物連鎖を切り抜け、健全な親に育ち、益々豊かに生き続け、絶滅動物図鑑にならないようにしてほしい。

最後になったが、今後、本書は各地で実施される臨海実習などでも大いに活用されるに違いない。また、大勢の一般市民にとっても、海洋国日本の豊かな自然芸術品を十分に鑑賞させてくれるだろう。プランクトンの観察やその撮影のポイントも収録されているので実用的でもある。また、フィールドへ持ち運べる手頃なサイズともなっている。現に、かくいう小生も、本書と共にこの原稿を書きながらの漂泊途上の陸生メガプランクトンで、水生に時折移行もあって…

久保田 信

(京都大学フィールド科学教育研究センター

瀬戸臨海実験所)